

平成20年産水稻の農業地域別作柄概況

1 北海道

田植期は平年に比べて2日早く、生育は田植期以降の低温により分けつが抑制されたものの、出穂期は平年並みとなった。

穂数は分けつが抑制されたことからやや少なかったものの、1穂当たりもみ数は7月上中旬が高温で経過したこと等から多くなり、全もみ数は多くなった。

登熟は、8月中下旬の低温により一時停滞したものの、全般的に高温・多照で経過したことにより順調に推移し、平年並みとなった。

作柄は、低温の影響から登熟不良となった網走地帯を除いて被害は平年を下回り、登熟はおおむね平年並み以上となったことから、主産地の上川、北空知及び南空知地帯の10a当たり収量はそれぞれ595kg（作況指数107）、598kg（同107）、552kg（同105）となり、北海道全体では、10a当たり収量565kg（前年産対比109%、作況指数106）となった。

2 東北

田植期は、遅植え等により宮城県で平年より1日遅れた他は、各県で1日ないし2日程度早くなった。生育は5月から6月にかけての低温の影響から初期生育が緩慢となったが、梅雨明け以降順調に推移し、出穂期は山形県で平年より1日遅れた他は平年並みないし1日程度早くなった。

穂数は、青森県、宮城県及び福島県で平年に比べてやや少なくなった他は、平年並みないしやや多くなり、1穂当たりもみ数は各県で平年以上を確保したことから、全もみ数は宮城県でやや少なくなった他は平年並みないしやや多くなった。

登熟は、8月中下旬に低温の影響により一時緩慢となったことから、9月以降天候が回復し登熟が進んだ青森県でやや良となった他は平年並みとなった。

作柄は、青森県が10a当たり収量611kg（作況指数105）、岩手県が538kg（同101）、5月から6月にかけての低温等による穂数減の影響が大きかった宮城県が522kg（同98）、秋田県が602kg（同105）、山形県が617kg（同104）、福島県が539kg（同100）で、東北平均では10a当たり収量571kg（前年産対比102%、作況指数102）となった。

3 北陸

田植期は、福井県で平年並みとなった他は、育苗期間が高温で推移したこと等から平年に比べて1日から2日程度早かった。生育は5月から6月にかけての低温で一時緩慢となったものの、梅雨明け以降は高温・多照で推移したことから、出穂期は新潟県で平年並みであった他は2日ないし5日程度早くなった。

穂数は、新潟県で疎植指導による株数の減少がみられることからやや少なくなった他は、平年並みないしやや多くなった。1穂当たりもみ数は福井県で平年並みとなった他はやや多くなり、全もみ数は各県ともにやや多くなった。

登熟は、9月上旬以降の好天により新潟県でやや良、他県では平年並みとなった。

作柄は、新潟県が10a当たり収量551kg（作況指数102）、富山県が552kg（同103）、石川県が527kg（同102）、福井県が529kg（同102）で、北陸平均では10a当たり収量545kg（前年産対比103%、作況指数102）となった。

4 関東・東山

田植期は平年に比べて1日早いなし2日程度遅く、生育は5月から6月にかけての低温・日照不足で一時緩慢となったものの、梅雨明け以降は高温・多照で推移したことから、出穂期は群馬県及び千葉県で平年に比べて1日ないし2日遅かった他は平年並みないし3日程度早くなった。

穂数は、梅雨明け以降の好天で生育が回復した神奈川県がやや多くなった他は、初期生育が抑制されたことによる茎数減から平年並みないしやや少なくなった。1穂当たりもみ数が補償作用等により各県で平年並みないしやや多くなったことから、全もみ数は埼玉県でやや少なかった他は平年並みないしやや多くなった。

登熟は、出穂期以降、登熟期間全般にわたりおおむね天候に恵まれたことから、平年並みないしやや良となった。

作柄は、茨城県が10a当たり収量537kg（作況指数103）、栃木県が547kg（同101）、群馬県が501kg（同101）、埼玉県が491kg（同99）、千葉県が559kg（同105）、東京都が409kg（同100）、神奈川県が507kg（同104）、山梨県が548kg（同100）、長野県が634kg（同102）で、関東・東山平均では10a当たり収量547kg（前年産対比104%、作況指数102）となった。

5 東海及び近畿

田植期は、東海地域で平年並みないし平年に比べ2日程度早く、近畿地域では和歌山県で平年に比べ1日遅かった他は平年並みないし1日程度早かった。生育は6月の日照不足等により一時遅れが見られたものの、7月以降の高温・多照の影響で回復し、出穂期は各県で平年並みないし3日程度早くなった。

穂数は、7月以降の好天で茎数を確保した大阪府でやや多くなった他は初期生育の遅れが影響し平年並みないしやや少なくなった。一穂当たりもみ数は補償作用等により各県で平年並みからやや多くなったことで、全もみ数は東海地域では静岡県がやや少なかった他は平年並み、近畿地域では和歌山県が平年並みだった他はやや多くなった。

登熟は、出穂期以降の天候に恵まれたことから、東海地域の各県及び和歌山県で平年に比べやや良、近畿地域の他の府県では平年並みとなった。

作柄は、岐阜県が10a当たり収量490kg（作況指数100）、静岡県が519kg（同99）、愛知県が516kg（同102）、三重県が512kg（同102）、滋賀県が530kg（同102）、京都府が522kg（同102）、大阪府が508kg（同103）、兵庫県が519kg（同103）、奈良県が520kg（同101）、和歌山県が505kg（同102）で、東海平均では10a当たり収量509kg（前年産対比103%、作況指数101）、近畿平均では10a当たり収量521kg（前年産対比104%、作況指数103）となった。

6 中国及び四国

田植期は、中国地域では平年に比べ1日早いなし1日遅く、四国地域では遅植え指導により高知県（普通期栽培）で3日程度遅くなった他は、育苗期間の高温等により平年並みないし2日程度早くなった。生育は、6月の日照不足の影響を受けた徳島県（早期栽培）及び高知県（早期栽培）で出穂期が平年に比べ1日程度遅くなった他は、梅雨明け以降の高温・多照で生育が促進され2日ないし4日程度早くなった。

穂数は、5月から6月にかけての低温・日照不足により高知県（普通期栽培）で少なく、鳥取県、島根県、広島県及び徳島県（早期栽培）でやや少なくなったが、他県では生育進度の違いか

ら7月以降の好天で生育が回復し平年以上を確保した。1穂当たりもみ数は中国・四国各県で平年並みないしやや多くなったことから、全もみ数は鳥取県及び徳島県(早期栽培)でやや少なくなった他は平年並みないし多くなった。

登熟は、8月下旬に一時低温・日照不足となったもののその後は好天に恵まれ、山口県及び香川県で平年並み、他の県ではやや良ないし良となった。

作柄は、鳥取県が10a当たり収量515kg(作況指数100)、島根県が511kg(同100)、岡山県が552kg(同105)、広島県が539kg(同103)、山口県が521kg(同103)、徳島県が504kg(同106)、香川県が511kg(同102)、愛媛県が524kg(同105)、高知県が493kg(同107)で、中国平均では10a当たり収量531kg(前年産対比107%、作況指数103)、四国平均では10a当たり収量510kg(前年産対比106%、作況指数105)となった。

7 九 州

田植期は、田植え準備期に適度な降雨があった福岡県で平年より3日程度早くなった他は、高温障害を避けるための遅植えにより平年並みないし4日程度遅かった。生育は、早期栽培(宮崎県及び鹿児島県)は5月から6月にかけての低温・日照不足の影響により初期生育が抑制され、出穂期も平年に比べて4日ないし5日程度遅れた。普通期栽培も同様に初期生育はやや抑制されたものの、梅雨明け以降の天候に恵まれたことから出穂期はおおむね平年並みとなった。

穂数は、早期栽培で平年に比べやや少なくなったものの普通期栽培では平年並みないしやや多くなった。1穂当たりもみ数は佐賀県でやや少なくなった他は平年並み以上となったことから、全もみ数は佐賀県及び鹿児島県(早期栽培)でやや少なかった他は平年並みないしやや多くなった。

登熟は、早期栽培では平年に比べ病害等の被害が少なかったこと及び梅雨明け以降の好天で良となり、普通期栽培では局地的な大雨の影響等からやや不良となった宮崎県を除いて平年並みとなった。

作柄は、福岡県が10a当たり収量501kg(作況指数100)、もみ数減を登熟で補うに至らなかった佐賀県が517kg(同98)、長崎県が480kg(同101)、熊本県が522kg(同101)、大分県が519kg(同103)、宮崎県が511kg(同104)、鹿児島県が492kg(同103)で、九州平均では10a当たり収量508kg(前年産対比106%、作況指数101)となった。

8 沖 縄

第一期稲は田植え後の日照不足で生育がやや鈍化したものの、その後は台風被害もなく順調に生育した。第二期稲も八重山地域を中心に台風第13号及び第15号の影響で一部不稔粒が発生したものの、おおむね天候に恵まれたことから、県計としては10a当たり収量313kg(前年産対比111%、作況指数101)となった。